
黒板の謎

夏野ゲン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒板の謎

【Nコード】

N4479T

【作者名】

夏野ゲン

【あらすじ】

黒板の中に誰がいる。

七不思議は本当だった。そして七不思議は恋に落ちる。

前編

ある日黒板から手が生えていた。あるいは、手のようなものが。私は、気になって手を伸ばす。そこから先は覚えていない。

私が目を覚ますと、辺りは真っ暗だった。ここがどこかも分からず、私はただ途方にくれていた。それからどれくらいたっただろうか、私はどこか遠くのほうからのざわめきを聞いた。

「だれかいるの？ここはどこ？」

私はこれまでに出したことの無いような大声で尋ねた。答えは無く、ただざわめきが聞こえていた。

しばらくすると、先ほどまで聞こえていたざわめきが、次第に小さくなっていった。そして、誰かが少年のような声でこう尋ねてきた。

「だれかいるのですか？」と。

私は誰かが私にきづいてくれた事がうれしくて、夢中で答えた。

「ここにいます！ここはどこなの？ここから出して！」

しばらくまつと、この場所の聞きなれない地名と、彼の力では私をここから出すことができないということが教えられた。私は少しがっかりしたが、私にきづいてくれる人がいることを知って本当にうれしかった。

どれだけの時間が過ぎただろうか、私は眠ってしまったらしい。この場所はいつでも暗くて、時間さえも分からなかった。私は、昨日やってきた少年が、また訪ねてくれるのを待っていた。そしてそれほど待たずに、昨日の少年の声が聞こえてきた。

「あなたはだれ？」

それは私への疑問だった。そういえば私は彼がきづいてくれたことがうれしくて、昨日は、お礼言ってないし、自己紹介もしていなか

った。私は、自分の名前を、彼に伝えようと思った。しかし、私は自分の名前を覚えていないことに気がついた。そのことを彼に伝えると、彼はしばらくだまってからこういった。

「名前が無いなら、僕が君の名前をつけていいかな」

それは本当にいい考えだと思った。そしてぜひそうしてくれるように彼に頼んだ。

彼に名付けられて、わたしは、『ハル』になった。私は、その名前が本当に気に入って、彼に何度もお礼を言った。

そして彼は、もう帰らないといけないと私に告げてから帰っていった。

その後もたびたび彼はやってきて、わたしにいろいろな話をしてくれた。彼の好きなマンガの話や、はやっている遊びの話、どれも私が知らない話ばかりで、もっと聞きたいと思った。私の生活は、彼を中心に回っていた。私は、彼が来るときだけを、ずっと待っていた。

時々、彼以外の人の声が聞こえてくることもあった。そんなとき、私は黙ってその声を聞いていた。彼が私にそうするようにいったからだ。その日私が聞いたのは、××君が、サンを好きというような内容だった。小さいけど、熱っぽくて力強い声だった。そのことを彼に話すと、やけにうれしそうな声で、

「そうか、そうか・・・」

とだけ言っていた。

そのあとも、彼は『シュウガクリョコウ』で行った『キョウト』というところの話をしてくれたりした。私は、ずっと閉じ込められたままだったが、彼のおかげで退屈しなかった。私は、彼さえいれば、それだけでいいと本気で思っていた。

ある日を境に彼の声が、なんとなくあいまいな、何か隠しているような感じに聞こえるようになった。彼にそのことを聞くと、

「なんでもないよ！ほんとに・・・」

とだけ言っていた。その声が、いつだったか聞いた声のように熱っぽくて、力強く、私は、耳をふさぎたくなかった。彼は何も言わなかったが、彼は誰かのことが好きなのだと分かった。そして私はそのことを認めたくなかったのだ。

私は、彼のことが好きになっていた。

その日から私と彼の関係はよそよそしくなった。表面では、いつものように楽しい会話をしていた。でも心の奥では、彼が思いを寄せる人のことだけが気になって仕方が無かった。何を話しているのかも分からなかった。ただ、その人のことだけが気になった。

彼がその話をしたのは唐突だった。

「もうここにはこれない・・・」

彼は言った。私には、どういう意味なのかすぐには理解できなかった。息を吸い込んだ。はつきりした声で言おうと思った。でもダメだった。かすれた声しか出なかった。これだけしかいえなかった。

「どうして？」

彼は、彼がこれから『チュウガツコウ』という遠いところへいかなければならないといった。彼のその言葉を聞いたとき、私は、私の知らない少女と彼とが、一緒に歩いている様子を見たような気がした。彼が行ってしまうのは、その少女のせいなのだと思った。私の中で悪いのは全てその少女なのだという考えが、確信になっていった。私は、涙でゆがんだ声でわめいた。

「行かないで！ここから出して！行かないで！あなたしかいないの！出してよ！私と一緒にいて！こっちへきて！一人にしないで・・・」

その後も私は、わめいていた。泣いていた。腕を振り回して暴れた。ただとにかく悲しくて苦しくて、体中が痛むのも無視して、私は、泣き続けた。

どれくらいそうしていただろうか、彼の声が聞こえた。とても優しいいつもの声だった。

「ダメなんだ。君を出すことはできない。もういいんだ。もうお帰り・・・」

私ははつきりしない意識の中で、深く目を閉じた。ただ、心地よさと、充足感と、そして開放感を感じながら、深い眠りに落ちた・・・。

後編

僕の通っていた学校には、七不思議というやつがあった。例えば、『12時になると階段が12段から13段になる』とか、『音楽室のベートーベンの絵が動く』とかそういうやつだ。僕の学校で一番有名だった七不思議は、『6-4の教室の黒板には誰かが住んでいる』というわけの分からないものだった。昔から怪談物の本や、ホラー映画が好きだった僕は、こういった話を聞くと本当にわくわくした。それと同時にそんなことはありえないと思っているような、ひねくれものではあったが。だから、あの日6-4の教室から悲鳴が聞こえてきたときは、過去まれに見るぐらいの速さで、6-4へ走っていった。

6-4で悲鳴をあげたのは、ミノルとノブだと分かった。あんなやつらを見たせいで楽しい気持ちが一〇%ぐらい減った気がしたが、当面の興味は6-4の教室の中にあつたので気にしないことにした。中に駆け込み、噂の黒板を見ると、あの二人の汚い字で、一面に落書きが書いてあつた。中には『×××』とかお前ら小学校高学年にもなつて恥ずかしくないのか！というものまで書いてあつた。あまりに見苦しかったので黒板けしで消していると、一箇所、妙なところを見つけた。そこには、女の子の書いたような丸っこいかわいい文字で

「だれかいるの？ここはどこ？」

と書いてあつたのだ。最初は誰かのいたずらだろうと思った。でも、そうだとするとなぜあの二人があんなに驚いたのか説明できなかった。そこで僕は、確かめる方法を思いついたのだった。その方法はいたって簡単黒板にこう書いただけだった。

「だれかいるのですか？」と。

このとき僕は、返事がかえってくるのが分かっていた。なんとなくそう思っただけが、これは確信だった。

すぐに、見えないチョークで書いているように、音も無く、そして滑らかに黒板に次のような文字が書き出された。

「ここにいます！ここはどこなの？ここから出して！」

不思議なことに、怖くは無かった。僕はこの町の名前と、僕には彼女（たぶん女の子だろう）を出すことはできないことを黒板に書いた。彼女はお礼を言い、それっきり何も答えなかった。

家に帰り、僕は寝る前にいろいろなことを考えていた。黒板の裏にいる少女の正体や、彼女がなぜそこにいるかということだ。

次の日の放課後、僕はまた6・4の教室に来ていた。このことを誰かに教えてやろうなどとは微塵も思わなかった。このことは僕の一番の『秘密』なのだ。誰にも明かすことはできない。ちなみにミノルとノビのあほコンビは、先生にこのことを話して、病院に連れて行かれたらしい。ざまあみろと思った。

さて、その日の僕の第一声（第一筆か？）は単刀直入にこうだった。

「あなたはだれ？」

すぐには返事が返ってこなかった。僕は相手が正体を隠そうとしているのだと思った。でもそれは間違いだとすぐに分かった。彼女の答えはこうだった。

「名前が分からないの・・・」

今にも消えてしまいそうな字だった。悪いことをしてしまったと思った。そして口からでまかせに（腕からでまかせに？）こう書いた。

「名前が無いなら、僕が君の名前をつけていいかな」

彼女は、喜んでくれたようだった。しかし、自分でこんな提案をしたのに、名前を思いつかなかった。散々考えたあげく僕はこう書いた。

「僕は春が好きだからハルにしよう」
こういった。われながらなんてセンスが無いんだろうと思った。

この日から、僕とハルは友達になった。彼女は、本当にいろいろなことを聞きたがるので、いっぱい字を書かなければならなくて、帰るころには、手が疲れて動かさなくなっていた。

そして、僕はハルに、僕以外の声が聞こえても絶対に答えてはいけないといった。僕は彼女のことを知られたくないと思っていたから、これはどうしても必要なことだった。その一方で、僕は、『6・4の黒板の七不思議』について調べていった。そのほとんどは、『自分の名前を教えると魂を取られる』とか、『外に出してといわれたときに出してあげると答えると、取り殺されてしまう』とか、胡散臭いものばかりだった。

あるときハルがこんなことを言った（書いた）。

「そういえば、ノブ君という人が、伊藤さんという人好きだと言ってたよ」

これには本当に驚いた。ノブは、ミノルの子分で、アホでいつも鼻くそをほじっている様なやつだった。

それに対する伊藤というのは隣のクラスの委員長さんで頭もよく容姿端麗という人間らしくないような人だった。どうにもこの二人が付き合っているような姿は、想像できなかった。なんとなくにやけてきた。

「そうか、そうか」

とだけ答えて、（かいて）これをネタに、ノブのやつをからかってやろうと思った。今思えば、僕も結構子供でいやなやつだったかもしれないと反省した。

僕は、当時6年生だったので、『修学旅行』というやつに行くことになっていた。このことをハルに告げると、

「行つてらっしゃい」

とか言われて少し照れた。なんか新婚さんみたいだなと思った。やっぱり僕も子供だったのだろう。

修学旅行は、一言で言うと、すごく楽しかった。でも何もしていないときに、ハルが寂しがっているんじゃないかと思って少し後ろめたかった。

二泊三日の旅行はあっという間に終わり、またあの黒板の前に帰ってきた。旅行中にあつたことを話した。彼女は、心地よいタイミングで合いの手を入れてくれるので、なんとなく調子に乗って、あること無いこといろいろ書いた。

その夜、僕は顔も知らない少女と一緒に手をつないで歩いている夢を見た。顔も知らないのに、その柔らかい手のぬくもりと、やさしい声、そしてまとう雰囲気は…間違いなくハルのものだった。

確信した。

僕はハルが好きになっていた。

普通じゃないことは分かっていた。黒板の向こうにいる何者かも分らない誰かを好きになるということは。でも関係なかった。それでも僕がハルを好きだ。

その日から僕は、ハルと話しているとき、意味も無く気恥ずかしくなってしまうたり、言葉（文字？）につまってしまうたりした。あるとき彼女にこう聞かれた。

「どうかしたの？」

それだけの言葉に本当にドキツとした。きづかれたと思った。僕の字は、本当に震えて読めたものではなかった。

そうして、時は過ぎていった。僕は、あることを告げなければならぬと思っていた。そのことは、僕にもそして彼女にも悲しい結末をもたらすことは分かっていた。でも、僕は彼女にそのことを告げなくてはいけない。それは、彼女を好きになった僕の責任だと思った。

「もうここにはこれない・・・」

僕の最初の言葉は、唐突なものだったろう。すぐに答えが返ってきた。

「どうして？」

字はひどく震えていた。僕は、中学校に進学することを理由としてあげた。でもこれは、本当の理由ではなかった。本当の理由は、もっと辛いこと・・・。彼女は、次々と書き出した。「行かないで！ここから出して！行かないで！あなたしかいないの！出してよ！私と一緒にいて！こっちへきて！一人にしないで・・・」

これまでに見たことが無いような激しい筆跡だった。そして、その

字は、徐々に鮮血のように赤くなっていく。

彼女の叫びは次第に姿を変えていった。

「行くな、こちらへこい。私をおいていくのか、逃げるのか、殺してやるぞ、永遠に呪ってやる」

字は彼女のものではなくなっていた。これが、黒板の七不思議の正体だった。黒板からは、鮮血のような色の呪詛と無数の腕が現れ、地震でもないのに黒板が揺れている。おそらく彼女は、自分が僕を殺そうとしていることに気づいていないのだろう。自覚は無くても、彼女はこれまで何人もの人間を取り込み殺してきたのだ。いろいろ調べてそれが分かった。

僕は、異形となった彼女に恐怖を感じることは無かった。僕はこれ以上彼女に罪を重ねてほしくないとそれだけを思った。彼女をここから解放することが僕の仕事だった。僕は終わらせるための言葉を描く。

「ダメなんだ。君を出すことはできない。もういいんだ。もうお帰り……」

返事は無かった。そこには、鮮血のような色の字も腕を伸ばした黒板もなく、元に戻った夕焼け色教室で、僕は泣き続けた。

その日から、6・4の黒板は、ひとりでに文字を描かなくなった。黒板からハルはいなくなった。僕にはわかる。この胸の中に残る喪失感で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4479t/>

黒板の謎

2011年5月24日13時25分発行